

1929年にノーベル文学賞を受賞したドイツの作家、トーマス・マンが書いた『魔の山』を読み終えた。どんな画素数でも分解できないような、なめらかで複雑な文学的表現に感動をおぼえる内容であった。

この物語はドイツ教養小説という分類がされていて、主人公である青年ハンス・カストルプがスイスのアルプス山脈にあるサナトリウムでの療養生活を通して、様々な人物と出会い、人格的な成長をしていくという物語である。

ハンス青年が会会う人間はさまざまで、ハンスへの影響もさまざまである。いとこのヨーアヒムからは時間の概念について学び、イタリア人の文学者セテムブリーニと古典語教授のナフタとの哲学的議論を聴き、ロシア夫人ショーシャに恋をする。サナトリウムでの生活は奇妙な出会いと理知的な会話に飛んでいて、ハンスと共に、読者はこの生活にどっぷりと漬かりこんでしまう。

ぼくはなぜか、この物語をちいさな物語だと感じた。

たとえば地球科学の講義で、宇宙の広さについてのとても基礎的な内容を学んだ人間はだれでも、自分の住んでいる星や、自分が生きていることそのものをとても矮小なものだと顧みるだろう。そんなような、感覚。

著者のトーマス・マン自身はとても壮大な、ぼくたちが生きている世界のすべて、哲学や恋や死生観や政治や争いなどを描いたつもりなのだろうと思う。彼はこの物語を書き上げるのに12年の歳月を費やした。彼の眼で見えるすべてのものを彼の中で分解し、再構築して物語の形に組んだのだろう。

しかしそれが精巧すぎる。微小な機械部品が組み合わさった機械式腕時計のように、とにかくも緻密な言葉と展開の組み合わせり方は、ぼくに、この物語が何かちいさなものだという印象を与えた。それは美しく、手の中に収まるように完全な世界をマンが完成させたということだろう。

ぼくはそのちいさくて、なめらかにまるい世界を、これからのぼくの人生のすみっこに、ずっとスノードームのように飾っておきたいと思う。